

テナー・サクスの、そしてジャズ教育の第一人者として知られるジョージ・ガゾーン。ギタリスト、ホメロ・ルバンボ率いるブラジリアン・ジャズ・トリオ“トリオ・ダ・バズ”。両者の夢の共演が実現、そこにピアノのケニー・ワーナーも加わったガゾーンの久々のアルバムが、このヴィーナスレコード第1弾『恋とボサノバの夜』。ヴィーナスは「ピアノ・トリオのヴィーナス」というイメージが先行するが、サクスの力を入れていることでも定評がある。ファラオ・サンダース、バルネ・ウィラン、アーチャー・シェップなどの話題のアルバムを次々に世に送り出し、この数年でも、エリック・アレキサンダー、スコット・ハミルトン(共演作)、ケン・ベプロフスキー、フランチェスコ・カフィーソ、ボブ・キンドレッドなど、多くのサクスメ奏者たちがヴィーナスから新作を発表している。今回、その充実したラインアップにガゾーンがリスティングされることになった。

このジョージ・ガゾーン+トリオ・ダ・バズ+ケニー・ワーナーによるボサノバ・アルバムは、秀逸なコンセプトだ。ガゾーンはジャズ教育者としてジャズ界に知らぬ者はないほど有名であり、そのため彼単独の初リーダー作の発表は遅くなった。その初リーダー作『アローン』(1995年)は、スタン・ゲッツへのトリビュート・アルバムだった。ゲッツの愛楽曲集であり、ボサノバ時代の代表曲も収録されていた。また、ガゾーンは他のアルバムでジョン・コルトレーンへ捧げた自作曲や、コルトレーンのオリジナルを収録した。ゲッツとコルトレーンが、ガゾーンのフェイスリット・テナーといえる。ゲッツとコルトレーンはテナー・サクスの大きな流れを形成する。その中にはゲッツのボサノバ、コルトレーンのフリー・ジャズも含まれる。ガゾーンのテナー・スタイルには、それらがすべて含まれており、ジャズ・サクスの教育者として理想的ではないだろうか。そんなガゾーンの特徴のひとつであるボサノバをテーマにしたアルバムの共演者として、トリオ・ダ・バズは最高の選択のひとつだ。ルバンボは現代ブラジリアン・ギターの第一人者。渡辺貞夫などの共演で何度も来日しており、日本でもおなじみだ。ルバンボのギター・サウンドは、ジェントルで心地よい。彼は優れた音楽センスと構成力を持つ。彼が演奏に入ると音楽に落ち着いた安定感が生まれるように思う。共演者はルバンボの心地よい演奏にホク酔いしながら、自分の演奏に集中できる、そんなギタリストである。トリオ・ダ・バズは、まるでトリオがひとつの意思を持っているような一体化した演奏を聴かせる。余程、息が合っているのだろう。ピアノのケニー・ワーナーは優れたテクニックと豊かな表現力の持ち主。繊細でやわらかいタッチが魅力だ。そんな彼らを迎えた、ガゾーンは全編で心地よいサウンドを響かせながら、テンションが高く、同時にリラクゼーションをともなった演奏を展開している。ガゾーンと彼らのコラボレーションは、今のジャズ・シーンをよく知るヴィーナスならではの好アイデアといえるだろう。

ジョージ・ガゾーンは1950年9月23日、マサチューセッツ州ボストン生まれ。6歳からテナー・サクスを始め、ファミリー・バンドで演奏する。パークリー音楽院で学んだ。1972年にボストンを拠点とするジャズ・トリオ“ The Fringe ”を結成して話題を呼ぶ。ベースのジョン・ロックウッド、ドラムのボブ・ガロッチからなるフリー・ブローイング・スタイルのバンドだ。ボストンという土地柄もあり、先に天職としてガゾーンの才能が発揮されたのが教職だった。ガゾーンは母校パークリー音楽院をはじめ、ニューイングランド音楽院、ロンギー音楽院(以上、マサチューセッツ州)、ニューヨーク大学、ニュースクール大学ジャズ&コンテンポラリー・ミュージック・プログラムのジャズ講師として長年にわたって活躍している。「The Triadic Chromatic Approach」理論のバイオニアだそうだ。90年代の半ば頃から活動の拠点をニューヨークに移した。ガゾーンの教えを受けたサクスメ奏者には、ブランフォード・マルサリス、ジョシュア・レッドマン、マーク・ターナー、テオドロス・エイブリー、スコット・ロビンソンなどがいる。サクス以外の楽器には、ダニーロ・ベレス、ブルース・パース、アントニオ・サンチェス、クリス・ウッド(メドスキ、

- ## Night Of My Beloved
- 恋とボサノバの夜
- ### George Garzone & Trio Da Paz
- ジョージ・ガゾーン・アンド・トリオ・ダ・バズ
- フェリシダージ** Felicidade 《A. C. Jobim 》(9:25)
 - ジェントル・レイン** Gentle Rain 《L. Bonfa 》(5:51)
 - ショーロ** Choro 《A. C. Jobim 》(4:06)
 - さよならを言うために** Pra Dizer Adeus 《E. Lobo 》(5:54)
 - アローン** Alone 《G. Garzone 》(5:45)
 - 恋人との夜** A Noite Do Meu Bem (Night Of My Beloved) 《D. Duran 》(6:05)
 - 愛の語らい** Falando De Amor 《A. C. Jobim 》(5:43)
 - バラード・フォー・ラナ** Ballad For Lana 《G. Garzone 》(6:01)
 - いそしぎ** The Shadow Of Your Smile 《J. Mandel 》(5:30)
 - フォトグラフィア** Fotografia 《A. C. Jobim 》(4:36)

ジョージ・ガゾーン George Garzone 《tenor sax 》
ケニー・ワーナー Kenny Werner 《piano 》
Trio Da Paz:
ホメロ・ルバンボ Romero Lubambo 《guitar 》
ニルソン・モッタ Nilson Matta 《bass 》
ダデューカ・ダ・フォンセカ Duduka Da Fonseca 《drums 》

録音：2006年8月8 & 9日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in N.Y. on August 8 & 9, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Artist Photos by Mary Jane Photography
Front Cover : © Peter Guttman / Corbis
Designed by Taz

マーチン&ウッド)、ルシアーナ・スーザなどがいる。ガゾーンに師事した日本人ジャズ・ミュージシャンもたくさんいるようだ。最近では、パークリーで学んだアキコ・グレースが、ガゾーンのカルテットで活動したことが知られている。教職のかたわら、ガゾーンが共演してきたジャズ・ミュージシャンの名前をあげていけば、ジャズ紳士録が出来上がるだろう。前述したように初リーダー作の登場は遅くなったが、その95年以来、本作を含めて7枚のリーダー・アルバムを録音している。それに先んじて、ザ・フリンジでは、78年のファースト・アルバム以降、長年にわたり録音を続けている。実に息の長いグループだ。サイドメンでの録音も、ジョー・ロバーノ・ノネット、ジョージ・ラッセル、マイク・マイニエリ、ダニーロ・ベレスなど数多くある。

ホメロ・ルバンボは1955年7月20日、リオデジャネイロ生まれ。幼い頃からクラシック・ピアノを習い、13歳でクラシック・ギターに転向。ヴィラ・ロボス音楽学校で学ぶ。エンジニアの勉強もした。85年にニューヨークへ移住。それ以来、世界的な活躍をくり広げている。主な共演者は、アントニオ・カルロス・ジョピン、アストラッド・ジルベルト、エルメート・パスコワール、フローラ・プリム、イバン・リンス、ダイアン・リーブス、ハービー・マン、フィル・ウッズ、渡辺貞夫など。90年にニルソン・マッタ(ベース：サンパウロ出身、リオで学ぶ)、ダデューカ・ダフォンセカ(ドラム：リオ出身)からなる“トリオ・ダ・バズ”を結成した。Pazは平和の意味。これまでルバンボの単独リーダー作は4枚、トリオ・ダ・バズでも4枚、そのほかコラボレーション作、参加作は多数ある。

もう一人の参加メンバー、ピアノのケニー・ワーナーは1951年11月19日、ブルックリン生まれ。11歳でレコーディングを体験。77年に初リーダー作を録音。現在、彼もニューヨーク大学の講師を務めている。

フェリシダージ

アントニオ・カルロス・ジョピンが作曲したボサノバ・スタンダード。映画『黒いオルフェ』(1959年)の挿入曲として書かれた。フェリシダージの意味は幸福、幸運。ジョージ・ガゾーンの演奏は、9分を超えるロング・バージョンながら、語り口のうまさで惹き付ける。ジェントル・レイン

ボサノバ・ギタリスト、作曲家のルイス・ボンファが映画『ジェントル・レイン』(1966年)の主題歌として作曲した。「黒いオルフェ」に続くボンファの人気曲。アイリーン・クラールやダイアナ・クラールなどのボーカル・バージョンがよく知られているだろう。ここでは、ギターのための伴奏でテーマを演奏した後、ピアノ・トリオが加わる展開だ。

ショーロ

ジョピンが彼のアルバム『ストーン・フラワー』(1970年)で発表したインストゥルメンタル・ナンバー。少しセンチメンタルな愛らしい曲。ガゾーンの流麗なテーマとアドリブの途中で、ホメロ・ルバンボのソロがフィーチャーされる。ショーロは19世紀にリオで誕生したブラジルのポピュラー音楽。

さよならを言うために

ボサノバ以降、MPBのアーティストとして活躍した作曲家/シンガー、エドゥ・ロボの作品。憂いをたたえたソフィスティケイテッドなナンバーで、マリア・ベターニャ、エリス・レジーナなどの録音がある。哀切感を伝えるガゾーンをはじめ、ホメロ・ルバンボのギター、ケニー・ワーナーのピアノも素晴らしい。

アローン

ガゾーンのオリジナル。彼の初リーダー作『アローン』のタイトル曲。その時はブラジル出身のジャズ・シンガー、ルシアーナ・スーザの歌がフィーチャーされていた。ブラジリアン・テイストの美しいバラード。

恋人との夜

夭折したサンバ・カンソンの歌手ドロレス・ドゥランが作詞作曲したラブ・ソング。彼女の死後に制作された伝記映画のタイトルにもなった。切なさにあふれるナンバーで、ガゾーンのテナー・サクスは、曲に纏られた思いを十二分に伝える。ここでもピアノとギターが印象深いソロをみせる。

愛の語らい

アントニオ・カルロス・ジョピンの1979年の作品。ジョピンの晩年のレパートリーで、シャンソンのような曲調だ。エディ・ヒギンズ、ステファノ・ボラーニなどがヴィーナスレコードのアルバムで取りあげている。

バラード・フォー・ラナ

ガゾーンのオリジナル。これもアルバム『アローン』からの再演。ガゾーンが彼の娘に捧げたバラードだ。ここではギターが抜けて、ワン・ホーン・カルテットで切々と演奏されている。

いそしぎ

映画『いそしぎ』(1965年)の主題歌として作られた人気曲。映画の原題は「The Sandpiper」,主題歌の原題は「The Shadow of Your Smile」。ジョニー・マンデルの作曲、ポール・フランシス・ウェブスターの作詞。ボサノバ・タッチで演奏されることの多い曲で、ジャズ・カバーもたくさんある。ガゾーンはギターとベースのみの伴奏で演奏し、ルバンボのギター・ソロもフィーチャーされる。

フォトグラフィア

ラストはジョピンが1959年に作曲した名曲。同年のシルヴィア・テリスのアルバム『Amor de Gente Moça』に収録された。ガゾーンは歌心豊かなアドリブで魅了する。

(高井信成)